

13  
3591  
4





門 13  
號 3591  
卷 4

圖書

日本國開闢由來記卷三

日本國開闢由來記卷三

指漏漁者編

太祖東征の功績不依天業宇内不恢弘

背日神の威を負影隨て賊虜を壓躡

神武天皇を神日本磐余彦天皇と稱す彦波瀲武鸕草薹不合命の

弟四の御子なり母玉依姫とまむ我邦の太古神も人も皆私情

なけを必兄を以て世を嗣とせし唯其徳の優りのを撰ぶ故に

兄五瀬命稻飯命三毛野命を置て立て太子となりて天皇生み給

ありて明達意確如まゆも長とわりて日向國吾田の邑吾平津

媛を娶て妃となす手研身命を生みて年四十五歳なるに時

卷三

早稲田大学 図書館  
昭和 35.10.12 燹  
蔵 書

圖書



3591  
1

其兄五瀬命等と御子手研耳命と高千穂の宮に坐して相議さすべし  
此日向國の邊僻あり王化を普く天下に及ぶ便宜ありけり何の地は  
遷りて大業を成就せん昔我天神高皇產靈尊と大日靈尊此豊葦  
原の瑞穂國と我天祖彥火瓊杵尊に授けしなり是に於て彥火瓊杵尊  
天の磐坐を離れ五百重の雲を排闥き御前を馳蹕して此土に戻止  
たまひて運の鴻荒に屬し草昧に鍾ぬるを唯其屯蒙たるをけり淳素  
なる風俗に隨ひ唯專一に正直の道と養ふを以て此西偏に在り世を治め  
たまひ我皇祖皇考のたまも神聖ありけり慶を積暉を重て多  
の年所を歴するあり天祖の此邦に降跡たまひてより以來今も速く二千  
四百七十餘歳なれども遼邈ある地は猶いまも王化の德澤に霑ず村落の

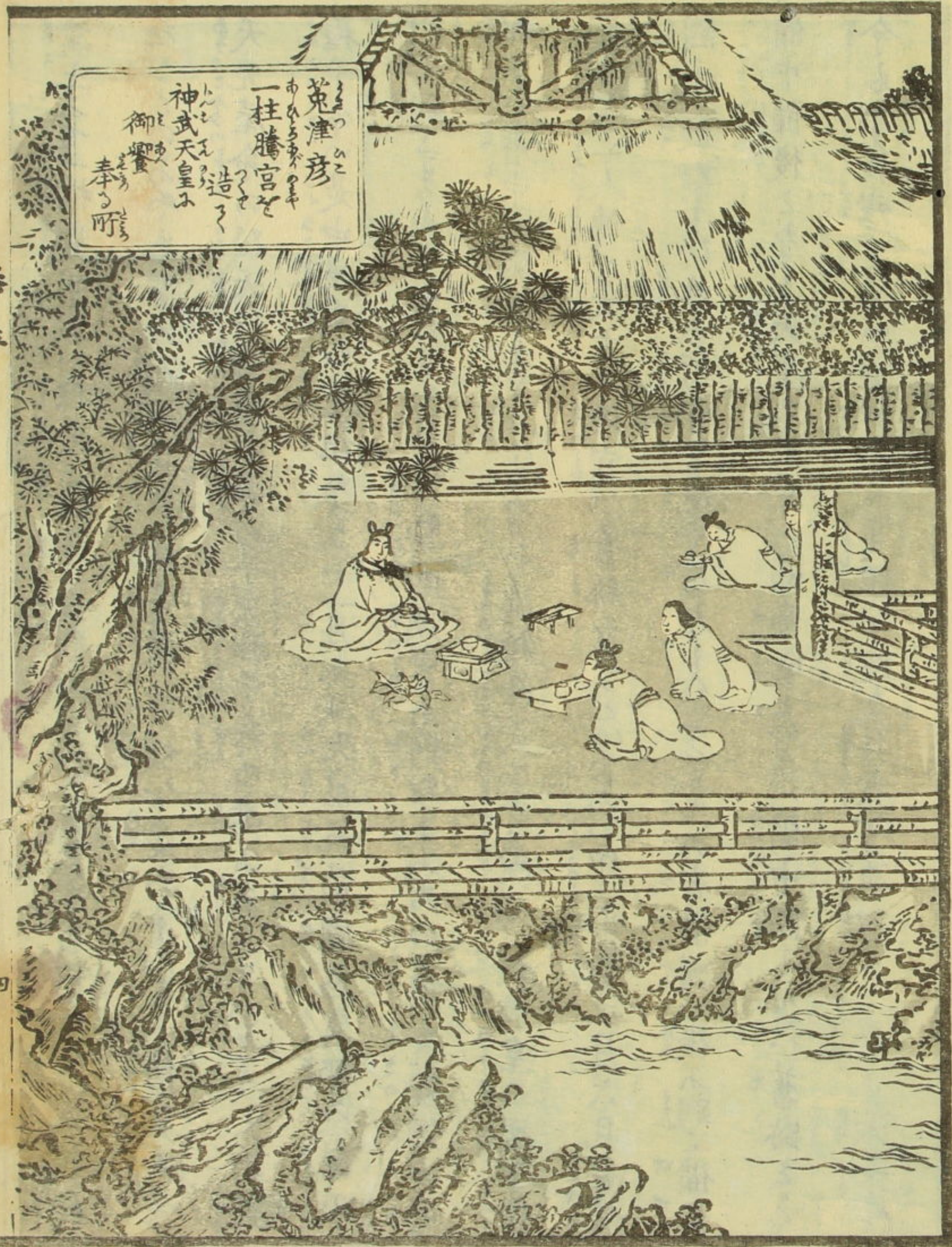
各自君長ありと稱し決て疆界を分て相互に凌燦りの多し治難し  
昔吾塩土の老翁に聽たることなり此日向國より東の方に當り青山四方に  
環回し山河の風光擅美き美地あり其中小天の磐船に乗て天上より飛下し  
者ありといふ吾謂ふ彼地は天業を恢弘す天下を光宅とすなり可き地あり  
て蓋六合の中心なるなり厥飛降しといふの察ふ是必饒速日ありん彼  
天の神は御祖の詔を稟て大虚空を翔行ふの郷を巡視し河内の國河上  
の峰に峯に天降て倭國鳥見の白庭山に遷居し聽き必是なるなり  
故に吾もも此地に就く都すなりわりのありの議如何と詔すなり  
諸兄及皇子も僉曰く詔の昔に理實灼然なるを臣等も恒に其  
事と念ぬることあり速くを啟行しと答奉ける是に於て太歳



甲寅きつねふ當あつ冬ふゆ十月五日じゅうがつごにち不ふ戎装えいさう威整ゑいせい々々天皇親諸兄及皇子てんかうしんしよあにみまう帥しゆい東とう出しゆ  
て。豊後國速吸の水門ぶんごのくにすみすみのみづかど小到せうたうさすす時とき一箇いつくわんの漁人いしよじんの艇てい小乘せうじやうて來きたりり。依よく  
粟あしの忌部いみべの首くびの祖そ天あまの日ひ鷲じゆ命みことと遣つらて。こをこと見みせしめねさふふ女むすめをを還かへ  
來きたて復命ふくめいまますすハ彼かれハ此國ここのくにの主ぬしなり。名なと珍彦ちんひことままををすすよよと答こたへししハ召率めいそつて  
來きたたりと云いふ。御前ごぜん小見せみええむ。珍彦ちんひこ天皇てんかう小白せうはくハ臣おみハ此海灣このうみわん魚いさなを釣つて居ゐり。故ゆゑ  
天神てんじんの御子ごしの來きたりりと聞きく。故ゆゑ小迎奉むかひほうんんと思おもはるる。御使ごしを賜たまはるる。速すみに  
参まゐりりとままををけけここをを天皇てんかう問とひひ。然しかららええ汝みづか々々委まかすす海陸うみりくの路みちをを知しぬぬん。  
我われ為なすす導仕おんしんんやとありけけここハ疾はや小領掌りやうじやうたりりと云いふ。天皇てんかうの勅おとせみみく。珍彦ちんひこ  
小推橋せういしほの末すえを授たまはるる。そをを捕とらへへ。皇船きやうふね小牽納けんなつとままひひて。以もつて海路うみぢの導者おんし  
と云いふ。ここをを賜たまはるる。推根津彦せいこんづひことぞ呼よべべ。めめたたままりり。れれ即すなは倭やまとの

直部ちくべ等ら始はじめの祖そなり。其處そのところより行ゆつて筑紫國ちくしよくに菟狹うさ小到せうたうとままふ。此地このち今いまハ豊  
前國ぶぜんくにの郡ぐんと云いふ。乃すなは菟狹うさの國造くにぞうの祖そ小彌やを兄あにハ菟狹津彦うさづひこといいふ。妹いもうとを  
菟狹津媛うさづひめといいふ。兩人ふたりの者ものなり。天皇てんかうを迎奉むかひほうり。菟狹の川うさのがは上かみハ一柱いちちゆう騰官たうくわん  
を造つくる。其處そのところ小入奉いれほうる。饗膳きやぜんを奉ほうり。乃すなは一柱いちちゆう騰たうといいふ。今いまその造構ぞうかうのま  
成なりなり。一方いつはうハ宇佐川うさがはの岸きしなり。山やま陞のぼりり沿よりり建たたたるる。一方いつはうハ川がは臨のぞみみ流なが  
の中なかハ大おほなる柱ちゆう唯一いついを建たたたるる。支さすすものなるるなり。そをを川がは乃すなは方かたより  
視みるる。川がはの中なかハ建たたたるる柱ちゆうのの高たかく騰たうるると云いふ。一柱いちちゆう騰官たうくわんといいふ  
なるるなり。今いま宇佐八幡宮うさはちまんみやうの西にしハ驛館川えきくわんがはといいふ。その水みづ源みなもとハ大おほなる  
石いしの穴あなを穿うちちるるの多おほく残のこりりあるる。土人つちびとハ其その舊跡きよせきなりといいふ。傳つたへへ。柱ちゆうを  
足あしといいふことハ。後のちの世よハ左ひだり右みぎ四柱よんちゆうの門かどを四足よんあし門かどといいふの例れいなるるなり。

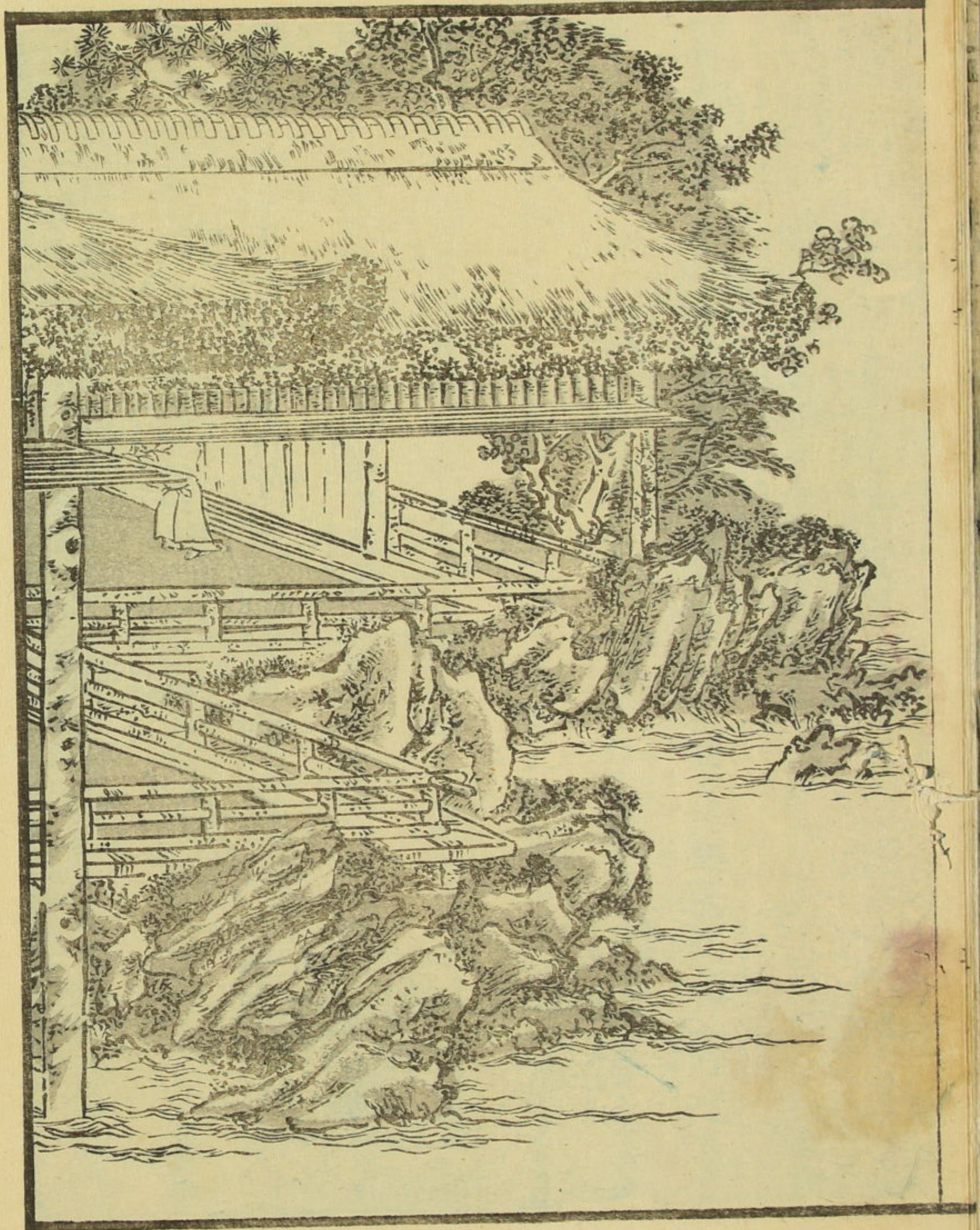




筑津彦  
一柱騰宮を  
造る  
神武天皇小  
御覽  
奉る所

卷三

四





漢土にて一柱觀。中一柱殿。或ハ木履觀をといふ。此ハ天の製造不類似  
たるものありあはれけん。天皇其妹菟狹津媛を愛たまひく。侍臣ある  
天児屋命の孫天の押雲命の子。天種子命の妻。命を爲さしめり。天  
種子命ハ是中臣氏の遠祖なり。十一月九日。天皇筑前國恩賀郡の崗水  
門に到る。十二月廿七日。安藝國埃宮に到る。此の處ハ安藝國安藝  
郡に在り。府中の總社なり。今もやうに進雄命。大己貴命。神武天皇三座を祭  
らる。土人傳て太古の埃宮ハ舊跡なりといふ。乙卯年春三月六日。吉備  
國より徙たまひ。此ハ行宮を造り居たまひたまふ。此の吉備國ハ後入れて備前  
備中備後と作る。天皇の坐せし高島宮といふ。備中國ハ其舊跡と  
今もやうに残る。此の軍艦を造り。兵食を蓄。以て一舉に天下を

平んと欲す。其の軍備を爲たまひけり。三年を積。其の軍實齊整て。戊午  
年春二月十一日。皇師遂に東の方へ赴き。船艦相接。難波の壽に到  
り。此の壽。奔潮あり。太急に會ぬ。因り其處を名づくる。浪速の國ともいふ。  
浪華此國ともいひ。今ハ難波といふ。此の訛もなかり。三月十日。流るる瀬  
徑ハ河内の國。草香の邑。青雲の白肩の津にあり。今ハ茂田郡の  
枚方といふ。此白肩の名は轉りたるなり。夏四月四日。皇師兵を勅  
大和國平郡郡なる龍田に趣く。ことを立野越といふ。今ハ世ハ龍田越  
といふ。此の異なり。此の龍田の路ハ狹嶮。人並行ことを得ざり。還  
て更ハ東の方。膽駒山を踰る。中洲に入たまふ。時ハ長髓彦の心を  
聞き。天の神は子を來さる。必定吾領國を奪んとの心なる。此の



あまを禦んて己が屬兵を盡く。こまを膽駒の内なる孔舎衛阪に  
らまの孔舎衛阪といひ河内郡の屬く名を草香嶺ともいひ今も世に  
暗誦するに其山の麓は日下の里といふ處なり。和泉國大島の郡に屬  
たり。皇師のこの長髓彦が兵と出會て戦ひ皇兄五瀬命流矢の腹に射ら  
れ大に痛悩たまひ且長髓彦が軍強し皇師造戦のついで天皇大に  
あまを憂たまひ一に忽神策を冲襟に運しといひ曰今吾のまの日の神の  
子孫ありて日に向く虜を征んぬとて天の道は逆り速に退還て弱きを  
示し神祇を禮祀す。昔の日の神の威光を負ひ影に隨て壓躡んぬ若し  
如此為らば曾く刃の血ぬらざらば虜の心自敗たるといひいふ。食曰然あり。  
我日御陰に從くあまを征くはあの虜の友て日に向の畏あり。然らば

神策の如く虜の心自敗んこと必定ならんと。遽に軍中を令せ下して且傳を  
復進とせしむ。軍を引く還たまひされば虜も中を敢て逼んぬ  
せど。是に於て御軍の易くと草香邑白肩の津に引とて盾を植並  
雄詰けり。あは雄詰といひ男叫といひ責聲を發て敵の勇威を示た  
る。後世陣中。時の聲を揚ぐことの初なり。此草香津に盾を植  
其處の名を改く盾津といひ。後記に草津といふ。五月八日草津山  
城の水門あり。茅津まの血沼といふ。今乃和泉國なり。時五瀬命矢  
創の苦痛大に進たまひされ。叙柄を握憤激雄詰して曰く。吾は大夫ありて  
賤奴の為に傷を被報きて死んぬとの悔。大に慨嘆たまひ。進  
紀伊國名草郡の龜山といふ地ありて。五瀬命の遂に軍中を死たまひぬ。天皇



大い歎歎悲哀せむひけきども。今詮たさといとされをその寛山の地の其  
奉る今其靈を祀り。久度山の神社といふなり。六月廿三日名草の郡名草邑  
のいとして。名草の郷を統領せむ名草戸畔といふを誅す。牟婁は郡なる狭  
野といふ地を過り。熊野の神邑後の俗に神入藏といふ處に到る。萬葉集に  
長忌寸與麻呂が歌より出せむ。若くも零來る兩神の崎狭野の渡ふ家も  
あつなくか。と詠ふ。此地なるを。神をみとと訓く三輪のさくをといふからん  
と古人もいひ。神の崎と三輪の寄といふも。紀州牟婁の郡ありて。定家郷の  
駒とめり。袖うらなむけむなりといふ。佐野の渡り歌も。熊野御幸乃  
御供あり。此古昔の實情のありのまゝなる歌を原より。辭を巧みいひて。  
軀裁大い劣るる歌あり。大和三輪のあふ。但混むべからずと論じて。え。

この地の神藏山と。磐石の聳て盾の如くあり。峯あり。土人これを磐楯と  
號。天皇の磐盾の上を登り。四方を眺望たまひ。されし御軍を引く漸  
進たまると。諸軍盡く船に乗し。海上暴風大風起る。狂瀾跳濤。皇船  
大い漂蕩々々。皇兄稻飯命天を仰て歎て曰く。嗟乎吾祖則天神也。海  
神の女なる。ふいふわくも。我を陸に厄て。なる復吾を海に厄やと言  
訖。叙を授て海に入。御持の神ありたまふ。まに他船に乗て。新良貴の國に  
渡り。その國の王となりたまふ。とあり。三毛野命も。大い恨たまひ。吾母及  
姨並ふ。こも海神なる。何為波瀾を起す。以漕溺やといひて。浪を踏。常世乃  
卿。赴たまふ。天皇卒ふ。二兄を失たまひて。痛嘆せむ。いづれも。いづれも。いづれも。  
やうたのせり。獨皇子手研耳命と。俱軍を帥。海路を涉たまひ。漸り



熊野なる荒阪の津小皇船を泊らまひあり。荒阪の津亦の名を丹敷の浦と  
もいひ。今ハ濱の宮といふ。新宮を距ること三里許あり。其の處より陸上りたまひ  
その濱の宮なる丹敷戸部といふ兒徒を誅す。これハ勝たまひ。その地  
兒神ありて口より毒氣を吐く皇軍を悩ませたま。人々おれお中々感瘁ぬる  
あり。皇軍復振のこころ。あざり躊躇たり。然るも其處小彌を熊野の高倉  
下といふ者あり。ある夜の夢に天照大神武甕槌神小葦原の中つ國甚喧擾と  
言ふ。轉々汝往く之と平げよとのたまひたれ。武甕雷神對て臣よとさる  
行とも吾平國の劍を下さ。國土おのづから平なんと申奉るも天照大神  
實ふ然りとこのたまひ之を諾まひたま。武甕雷神額て高倉下を召て吾劍  
を部靈といふ。今汝が庫の裏に置るるを速に取らよとて天孫小獻を

ありたり。高倉下の唯々と應ぬとて夢の覺ふなり。おと幽顯分界とて神と人  
とは通路ハ絶て。相視ことのをさ世とありける後あるを。高倉下が性慈忠  
實を以て其夢ふ此事を見せ。劍を下したまひるあり。高倉下ハ夢の様を  
奇異の事おけり。明且を待たむ。速に庫を開て之を視し。果  
屋を貫て庫の底板の上。倒小劍の落る立りけり。おれを取て御陣に奉  
て進奉るを。天皇大に喜悅たまひあり。此刀を佐士布都神といひ。ま布都  
の御魂と名はせり。石上の神宮に在るといひ。其處あり。中洲の大和の國小踰  
ところの路ハゆる。嶮紀く。分ける方も知難る。外ハ路もあらず  
也。諸軍いりて此山を跋陟んや。志を棲違る。其處お日ハ暮るあり。  
天皇もこの事を深く憂はまひ。や睡たまひ。其夜の御夢。天照大神



の詔。朕今頭八咫鳥を遣て郷導と為んと。のたまひしが。夜明く空を  
視たゆへを果して夥さ鴉の尋常のより大なるが。虚空より翔り降るを。  
天皇御覽して。此鳥の來よと。おのほのら祥夢み合ひ。大哉赫矣。我皇祖天照大  
神の基業を助成さよふよとの有難さ。いさや此鳥の行ふに従く。軍を  
遣とく。急令を傳て。先大伴氏の遠祖日臣命。大来目の督將元戎を帥し。あ  
る山を踏啓て行ふ其鳥の向くを尋て仰視て。われを追く驅り。遂に菟田の  
下縣に達到。ある傳ふ神魂命の孫。鴨建須見命。大鳥と化し。翔飛て導奉  
て。中洲に達し。天皇その功を喜て。厚く褒賞し。たゆみしものあり。其後  
八咫鳥の社。大和國宇太郡置高角の神社といひ。今いふまじ。乎登古路須社  
といふ。乃建須見命を祀奉し。ありともいひ。時日臣命の功を譽ね。ひて

汝へ忠告して且勇。加能導の功あれ。今より汝が名を改く。道の臣といふと  
勅ありけり。皇軍を丹敷の浦より伊勢の國なる大杉谷へ起す。吉野の  
河尻に到り。よふとれみ笠。汝作る魚をとるのあり。天皇立ち上り。汝を誰  
ぞと問ふ。ひし。は。僕は是菟草持の子なり。答。直に飯順をわらをり。  
此の阿陀の鷄養部。遠祖なり。其地より幸行。吉野首等。祖。井氷鹿。この  
者と。吉野の國。葉が祖の石押分の子なり。追ふ参迎く。従奉る。今も吉野  
川に浴く。南國。柘村といふありて。其邊七箇村をたぐ。國。柘莊といふあり。其地  
より踏穿越く。宇陀に幸す。たゆみしものあり。其幸し。し。ところを。て。  
菟田の穿邑といふなり。秋八月二日。天皇人を使さ。兄。猾及弟。猾。わら。ひ。つ。  
の。を。徴。し。む。の。兩。人。菟田縣の魁師なり。その兄弟といふ。の。は。大國主



神の八十神の如く同系より別れて。従兄弟再従三従兄弟とわたりても。その兄の家  
と兄とのひまの家の事を弟とのうぐ如く。唯同族と呼ぶものことえたり。その兄の  
召し應せし弟を御使と俱し軍門に詣りて。天皇を拜し奉る。且竊に  
告奉へ臣が兄が逆状を為し。天皇孫にたふしと聞け。兵を起て襲奉んと  
せしりとも。皇師の威を望見し。大に懼敢て敵し奉り難きこととあり。し  
潛し其兵器を伏匿し。新しき宮殿を造り。その殿の裏に押機を施す。御饗  
ふ事よむ。その中に入奉る。壓殺奉んとする。欺謀を為し。以て聞ぬれば。速  
し行く。さへぐし諫争し。いづれも更し美諾を止む。とを得ず。この事  
憚りしをすなり。善くこれを備えたり。たまふと。言上あり。天皇は。この  
聽し。道臣命を勅す。其及逆の状を察せしめ。わたりし。道臣命

往く。大を鑿て。その賊害奉んとする。奸謀あることを審み知り。これを  
大に怒りて詰責す。曰。虜爾が造り。この屋に爾居し。剣を按弓を彎。逼催  
て追入る。兄の恐懼狼狽す。遂に其新室に入。過てその機を踏。押  
し。壓し。撃れり。死す。その屍を引出し。寸断し。斬り。その血を流し。地を  
浸る。ふより。其處を踏。菟田の血原といひ。弟の肉と酒とを齎し  
來り。軍士を勞饗けし。天皇其酒肉を軍卒に班賜て。御歌を詠せ  
たり。その御歌は。

菟田の田垣に。離羅設。我待や。離を障らず。勇妙し。鯨障。前妻が。魚  
乞さば。立捕獲の。肉の長けく。幾許だ。聶孫後妻が。魚乞さば。拾實乃  
大けく。幾許陀。聶孫の。を。神世より。漸人の。世と。あり。と。



此の世に  
 唯古傳の  
 圖に  
 りの多吉  
 村道下  
 縣王遠祖  
 八咫鳥者  
 田之御と  
 人馬化し  
 おびき奉  
 ずの記せ  
 本文不傳  
 とらんと  
 此圖に  
 ありの



卷三

我邦の太古  
 陰謀横暴  
 行わむ者  
 先犯群衆  
 主跡と称  
 その悪意  
 土蜘蛛の  
 のいかに  
 この足馬  
 必馬の  
 日臣命の  
 導の敷  
 稱一の  
 ちんちん  
 大馬の  
 年々かく

八咫鳥  
 軍士と  
 導く  
 山路を  
 踰る處



+



前後の歌の意も詞もや異なることあるを。後の世に意を以て倉平  
小了解難きといふも多けれどよく歌味を我邦上古淳樸質實  
みして毫も縁飾なく。眞實なることの性情の其中小自見まじく。言  
外の深意あるのなり。六の御歌の大意を畧し釋を先この歌乃初句  
倭のといふ四字一句脱するやうにとり説あり。左にありて。歌の意  
々。倭の菟田の田垣と。田の圍小垣を結構たる處に。離を捕んと  
罾を張るるが。鳴へ障掛りせむ。思もよるぬ鯨が掛たるごと。弟猾が  
齋來し鯨を覽たまひ。兄猾が天皇を弑奉んと。設たる機小自己が  
壓して死たることを譬たまひたるのとなり。そとより下ふ其譬  
喩の意なき。軍士の妻妾など魚を乞ふるべ。此鯨肉の長く大

わゆるを幾許も聳あして多く與よと詠たまふ。立机稜と伊杵木へ  
實といふまの發語も。木の實を魚の肉のひくけるをを。を  
歌ふあも何ふゆ。その物の稱をいへんと。此發語を先言て後その  
事及ぼさ。我邦上古の習あり。畢竟人の心の寛舒なることより  
出るのなり。此御歌の御詞も諸卒の妻妾までも愛惠たまひ  
御意の自知とくが不ゆる。前後ともみざる譬喩とるの。後世の謬  
慮なるを

第五 志必克小在る軍將の戦勝る自誇者を誠む  
饒速日とて天人の隙を知衆を率る歸順

九月五日天皇菟田の高倉山の巔に陟たまひ。城中を瞻望たまふ。伊賀



村の上は方ふ伊勢伊賀兩國に跨ぐ。高く聳たる國見岳とゆう山あり其處  
み八十梟帥とて稀勇なる兇漢が。教多の黨與を召集く立籠り。女阪  
女軍を置。男阪も男軍を置。墨阪も炭火を設く備を堅く。み乃女阪とゆう  
宇陀郡宮奥村の西あり。十市郡の界なり。男阪とゆう。宇陀郡半阪  
村の西あり。城上郡乃界なり。男阪女阪とゆう。後世の追手搦手のこと  
み。軍士は勇壯そのを選。追手み屯させ。其餘を搦手の方不使し  
守らしむ。そをも男軍女軍とゆう。男女のことをせつみあはせ炭阪  
とて炭を阪に道に積置し。敵寄來らば其炭を燃して之を遮んや乃  
設なり。此處へ宇陀郡萩原村の西あり。本の炭阪なり。をその文字  
を轉く今墨阪と呼ぶなり。其他十市郡の磐余邑も。兄磯城等軍

充滿して天皇の御軍寄來らば拒戦んと待構ら。その勇賊の據るところ  
いづれも皆要害の地あり。道踏險絶し。卒に往通なき方あり。孫巴  
いづれなる智略驍勇者あり。容易攻入なきやうなり。とをえ。そめこの  
八十梟帥とゆう。其處此處に黨を結く住居。或は山岳に大室など。撃土  
を築。城郭を構。殘暴兇勇の徒を多く集て人民を悩む。蜘蛛の網を張て  
飛ゆく蟲を取ら。如くなる者も。時の人呼て土蜘蛛といひ。八十といふ大數  
をいひ其一群とて七八十の數に餘る梟帥なり。八十梟帥といふ。あは  
一人の名もあはざるなり。されど天皇も毫も屈滞とまら御情のた。唯土  
卒を多く損。之を征平せんことをおぼして先その首魁たる國見岳  
の八十梟帥を伐んと兵を勅く出たまふ。その御志も必克んとて存て御歌



を詠せたまふその御歌よ。

神風の伊勢は海の大石ふやの蔓延廻る。細螺子の吾子よ。細螺子の  
い蔓延廻る。撃て息ん御歌の意へ先ふ熊野を經く。伊勢の海は  
界わくる錦の浦乃邊中ても巡幸したまひしを其處あり海岸わくる  
大石ふ細螺子の多く匍匐廻るを御覽ありたるを今所念出させ  
たまひく。梟帥ども師らふの細螺子の大石ふ影く纏はさるる如く  
わらも一舉ふ打滅さるるそのぞの意ふ譬たまひく。将卒と親とて  
吾子どもらふく。皆然思ひくはるる。されど夥き細螺子の如く數多  
の勇賊たるも小敵なりと侮ふとならねど。諸軍の心を勵しつゝのたまふ  
かりや。

さのの餘黨たる繁々。其情もまた後測りなき。強り力戦を好まばたま  
ふも。密小道の臣は命小救して汝速小大来日部。率たると大石は士卒を  
帥く。大室を忍阪の邑小造せ。宴饗を設く。勇賊を誘導て之を殺せし  
勅ありとこそ。道臣命は速く其密旨を得く。勇小虚襟より此情を  
し。忍阪あり儲侍を告げしを。勇賊ども蠢思ふ。我小  
陰謀あること汝知ぞ。遂小誑賈されく。盡く集會ける。此方あり俄小大室  
と造りて後道臣命は。猛卒を遣出さる。陰小軍士小期て曰く。酒酣ならん  
ころ。吾則起く歌なう。舞ん。を時汝等吾歌の聲を暗令と意得く。  
期て過さむ。一時小起く。勇を刺殺せと示さる。坐定く酒を行く。勇小  
情小任く。恣小醉さる。道は臣命は起く歌なる歌。



忍阪の大室屋敷人多し。來入居らむ。瑞々し。來目の子ら。我頭推ひ石  
槌い持。撃てし止ん。○この歌は意々。頭推石槌の皆太古の劍  
名の。頭も。今も俗に。ある。なる。如く。頭の。と。劍  
の頭をひ石槌と。其頭を石と。造るもの。を。性歳大和  
の三輪。劍の頭を石と。槌の如く。造る。を。掘出せ。と。なり。  
人多く。此所。集居ら。あも。と。別く。久米部の帥。久米の子らよ。  
も。く。そ。佩たる。劍。も。刺殺せ。今。そ。擊。き。時。なる。  
ぞ。諸卒。下。知。り。なり。瑞々し。久米とい。ん。の。發語。なり。  
諸卒。此歌。と。聽。より。速。く。起。り。俱。不。其。劍。を。拔。く。一時。不。刺。殺。たり。と。を。  
此大室。不。来。たる。虜。の。喙。類。へ。盡。く。殺。く。遁。得。たる。もの。なり。と。皇軍。大。小。

悦く天を仰て大に笑ふ。その時道臣命を再うさる歌。

今者豫々々々。阿々朝咲。今ぶふも。吾子よ。○歌の意。虜乃心淺く  
し。誑。と。め。こと。の。可笑。も。喜。く。も。ある。こと。よ。今。と。ま。を。め。く。盡。く。殺  
し。吾子。等。の。功。ぞ。と。稱。嘆。く。阿々朝咲。と。哄。堂。嘲。噱。大。笑。し。を。歌。へ。り。り。  
後の世。久米舞の時。此歌。と。し。ひ。く。後。大。笑。へ。此。故。事。の。遺。れ。る。  
かり。と。い。ふ。なり。

道臣命まゝ歌て曰く。

虜を一人百人人々言ども。手對ひせ。○歌乃意を。虜等が自己一人  
を以て。百人。人。當。と。い。ふ。も。我。も。敵。當。者。と。一。人。も。な。く。て。皆。殺。され。たる。  
こと。の。其。辭。も。似。ね。怯。き。こと。の。ひ。く。戲。諷。し。なり。



天皇此等の歌を聴しめ。軍將士卒は歌を侮誇を御覽して詔し戦  
勝く驕ふとなさし良將の行なり。今蟲身小比き小賊を撃得たりとも  
漫不誇ことい最誠なきことぞとのさまりなり。後世の諺小勝て樂整乃  
紐を固詰といふ語也。此聖訓の遺意なく。實小國を開業を創とす所の  
御志の天理小出ると以て必克んものとおもむかふ故小克てなり自誇の  
を誠をすべし。有難き御事なり。天皇再のさへ。今魁賊を比しなりと  
同意者其黨與句々りのたろ十數群ありて。其情いま計易くを如何  
一處小止居く。以て變を制するとならんやとのさすひ陣營を別處小  
後とすひたり。冬十一月七日。皇師大舉て。磯城彦を攻んとす。先使者を  
遣く兄磯城を徵とす。兄磯城命を兼さるを以て。再頭八咫鳥を遣く之を召

す。頭八咫鳥といふ。建角身命のよとを以てなり。頭八咫鳥。其營に到く。天  
神の御子汝を召と。怡井參る。といひるを。兄磯城怒く。天の壓神到  
と聞く。吾あれを慨憤かりひるふ。奈何ぞや自夸慢く。吾を招つといひ  
て弓を彎くよとを射んとす。即小避去く。兄磯城が宅小往く。  
前の如く勅命を告を速とす。兄磯城も。慄然く容を改て禮を為て臣天  
壓命到たまふと聞く。且夕小畏懼く。御使を賜く。参るとあるとの身小  
餘く喜しといひ。頭八咫鳥を厚く食饗て後。俱小詣到く。告て曰臣が兄  
磯城。天神の子來とす。聞く。八十梟師を聚兵甲を具て與小戦を決せ  
んとといひけきた。臣あまを諫とすも聞がれた。止ことを得。獨到詣て告奉  
り。早くされと圖とす。とを申ける。あまよりて。天皇。諸將を會て問ま。



今兄磯城果て逆意ありた。いづれ招とも来り。如何に善うらん。各  
異見あり申すと詔々をば。諸將答く。兄磯城執強なるも再身磯  
城を遣う曉諭たす。兄倉下。弟倉下など。弟磯城にて説示  
いづれも歸順奉さうんとす。兵を擧て大に臨たす。いんとも  
申す。いづれと申す。天皇より寛仁大度ありし。けり。各  
實よりと諾をせしむ。乃弟磯城を御使して遣う。いづれも利害を  
開示せしむ。兄磯城現捨ありて拙計を固守て肯く養伏奉さるれば  
是より於て推根津彦謀て曰。今先我弱兵を遣う。忍阪の道より出  
る。虜いづれを視る。必銳卒を尽す。我軍も赴ん。その時吾の勤卒を馳  
馳し直小墨阪を登行し。菟田の水を取。これに赫炭を灌て。其火を消す。

倏忽の間、不意に出く。之を破んと必定なりといひけり。天皇その策  
を善くしむ。先弱兵を出し。これに臨し。めたす。虜を果し。大  
大兵の到ぬとわらひ。衆を盡し。此手に向ひ。力の限防んとぞ  
待構。皇軍の攻めを必取。戦ひ必勝といども。うち續く戦争  
ふ。介曹の士もや疲弊。氣色なき。天皇神速も其状態を  
察し。御歌をい。將士の心を慰む。その御歌ふ。  
盾列く。伊那瑳の山は。木間より。い行守ひ。戦へ。我の飢。鳥津  
鳥。鷓鴣が徒も。今助来ぬ。○は。御歌の意。菟田の郡の伊那瑳  
の山。樹の間を分。此處まで来。戦ふ。これに。衆軍悉。饑疲  
たらん。豫り約束し。わらわ。程なく。鷓鴣部が兵食を





卷三

十



金色の  
靈鷲  
飛来  
天皇の  
弓射止  
光を  
放つ所



齋来。軍士を饗應。我を助んり。然らば其の間事なれば。忍  
堪。待よ。か。と。聊士卒の心を慰む。ひ。し。盾並。盾を並  
み。箭を射。と。射。う。里。嶋津鳥。鷓鴣。の。例。の。發語。あり。  
虜。の。弱兵。此。出。る。を。視。果。して。椎根津彦。が。謀。お。と。勢。を。畢。し。て  
あ。こ。小。對。し。る。勇兵。を。墨阪。の。方。へ。廻。し。後。より。夾撃。み。ぞ。たり。る。虜。の  
意。の。外。出。た。る。と。み。ま。ば。大。小。周。章。蹂躪。衆。軍。忽。敗。走。て。遂。に。其  
梟。師。兄。磯。城。を。捕。と。殺。て。平。げ。さ。ま。ひ。たり。十二月。四。日。皇。師。長。髓。彦  
を。擊。つ。の。長。髓。彦。が。軍。強。く。し。て。卒。に。破。難。く。勝。を。取。こ。能。ざ。り。し。の。天  
忽。小。陰。く。雲。起。と。え。る。小。風。暴。く。氷。雨。降。出。し。空。の。色。朦。昧。み。り  
たる。中。より。金。色。の。靈。鷓。飛。來。て。皇。の。弓。彈。の。上。止。む。其。光。曄。焜。たる

恰も閃電の如くたり。長髓彦が軍卒皆迷敗。復力戦と能はず。  
大小碎易たり。衆軍奇異の思をぞ為しける。この長髓彦といひ  
り。これ邑の名なり。其の處に住る兇賊の名となり。然るに  
中古大和の國に。石棺を發し。その中に朽る骨の存くあり。其  
脛脚の骨極て長大なり。尋常の人と殊異なり。故にこれ大古の長髓彦  
埋地あり。その骨なり。と。邑の名の人の名となり。これを如何  
あ。ん。脛骨の長きよ。名を得たり。といひ。畢竟の臆想の説なり。を  
今。み。在。て。い。つ。と。も。定。て。言。難。し。此。地。を。時。の。人。號。す。鷓。鴣。の。邑。の。い。ふ。を。  
今。鳥。見。の。い。ふ。訛。と。り。往。り。長。髓。彦。と。孔。舍。衛。阪。の。戦。に。五。瀬  
命。流。矢。の。中。で。薙。す。ま。ひ。し。と。を。天。皇。の。深。く。御。心。不。街。り。ち。な。ひ。て。憤。懣



御情を懐せしむ。此後必其仇を盡く誅究くことを報んと欲す。御歌謠とす。其御歌み。

瑞々。久米の子等。垣本に。粟田ふち。氣韭一莖。其根が本。其根芽撃て。撃て止ん。○こは御歌の意。氣韭とく。臭氣のはるに。韭を長髓考。兎根の憎べき。譬。根の長髓考。芽の其黨類。譬。長髓考も黨類も。皆縦さす。漏さす。討滅盡て止んとす。久米の子等も。一同爾心得。よと勅を傳たす。ひらり。此御歌。粟田の韭を詠せたまひ。皇師の倭入し。數多の虜ども。被撃平けたる。ひら。年月を經くる。ことなきを。其間。殺をも種とす。ひたる。粟田の旁。偶韭の。一莖。生。出たるを。御覽じ。それを詠せたまひ。ひら。虜の作す。粟田の。

御目み觸しを詠せしむ。何れも後の世の如く殊更。粟田を設出て詠せたまひ。ひらり。

中々謠たせしむ。

瑞々。久米の子ら。垣本に。殖。薑口響く。予の忘む。撃て止ん。○その御歌の意。かの皇兄五瀬命。長髓彦の為。創傷を負。薑。を慷慨を。ふこの薑を咬く。口の疼て定まら。如く。其愁傷の今。忘難け。を撃殺さ。止む。この。生薑の和名を。け。う。と。う。の。契。辛味の舌を。齧。生薑。と。いう。意。爾呼。ら。ら。と。ぞ。

詠せしむ。ひけ。軍卒御意を。棄て。遣入兵を。縦。勵。攻。る。を。れ。ば。



長髓彦軍兵や拒むるをえたるが長髓彦より行人を遣く。天皇み申く曰  
嘗天神の子天の磐船に乗る天と降止て坐るその名を櫛玉饒速日命と  
いふ。此命吾妹三炊屋媛と娶く見息を生む可美真手命といなり。吾への  
饒速日命を君と奉てあり。そは天神の子豈而種あるんや。奈何ぞ更り  
天の神乃子なりと稱く。人の地を奪んとするを吾心み推察する必  
定詐  
諷なりんとぞ言せける。天皇の饒速日命のこゝろ豫より知りめたるごと  
なり。その確たる證左を視んと欲されをその使み詔する。汝が君と  
とら。果しくは天神の子なりを必表の物あるなり。そを相示すとあり  
けを。使還くそは旨を述し。長髓彦も。饒速日命の天羽矢一隻と  
歩鞞を以て天皇に示奉る。この羽々矢といふ二羽を以て造る矢あり。

長二尺五寸。こゝろを彎くところの弓乃長七尺五寸あり。そのは太古の制あり。此  
中世の三羽を用ふ。四羽を用く造り。の今上刺の鳴鏑を用るとらるなり。  
歩鞞と云。歩人の帯と云。この鞞なり。天皇これを御覽し。事實より  
虚なりとぞとてこれを歸すとす。自御たまふところの天の羽々矢一隻と  
歩鞞と。長髓彦の使み示たまふ。長髓彦は。その天の表乃物の饒速日命  
の齋來し物と。殊絶て尊貴ことを詳み知く。頗踞踏を懐と雖。おの  
執拗褊心強し。顧慮と云。且凶器已小構く。その勢中み休た。と云。一  
つ。猶迷圖を固守て復改んとす。意起き。つ。饒速日命の本  
より天神の慇懃に。此豊葦原の中國を天孫み授たまふ。を定理ある  
と。とを明み知く。長髓彦み説示といふ。も。長髓彦の稟性。復恨て。天道



の授と申すは、このころと。人の力を以て為とるは、大に相違ありて、私の智を以て  
よく悟逆の道を行はざることを知む。更にお受容る存尚なりしものなれば、止とせ得む。  
長髓彦を殺す。天神の子なる徵信の瑞を將之。之を天皇にお獻盡く其衆  
を率へ。歸順せり。天皇固より饒速日命の。天より降来しこと知りぬ。  
凡その證左をも檢とせしり。今も天の瑞物を獻す。既順し。その忠實の  
志を褒寵たまひ。授ふ神劍を以て。その勲勞に答たまひ。其子  
可美真手命も。天の物部を率へ。荒逆を翦平け。海内を平定し。是を  
股肱の職に配。子孫に傳へ。長く治世の補佐とせかりしことなり。此物  
部氏の遠祖なり。物部の武士の稱あり。萬葉集に、物之布、物部  
なりとも書く。武威勇猛のを呼て爾のこなり。我邦上古、天皇と始

とせしり。大臣たちも武事を研究し、第一の要務となす。専武を以て、  
天下を治たまひ。雄略天皇の頃より、囚獄決罰の事を司る者を物部  
とのひを責む武を卑む。柔弱なる唐土の制を交用たまひ。と。武官は、大に  
下て。我邦の上古、大臣の悉皆武官なることを遺失せしり。遂に天下の政  
の武家に移る。今の泰平の世とわたりしも、神の幽謀ふよるなるなり。  
餘論の暫む。己未年春二月廿日、諸將に命て士卒を簡練。殘黨を驅平ん  
と欲。専その軍備を為しめたまひ。是時、添下郡の赤鹿山に、新城戸畔とい  
ひのあり。まう同郡の和爾村の阪下に、居勢祝といひのあり。葛上郡の長  
柄丘岬に、猪祝といひの者あり。此三處の兇賊を、皆土人の呼く土蜘蛛といひ。  
此者とも、専石窟なりとも棲居て、出て人を悩むこと。彼深山にあり。大なる



土蜘蛛の物を害が如くなるふ似しをかくの呼をせらるる。あれらの兎賊ら  
皆残暴者あり。各その勇力を恃く。肯て來庭さるる。天皇御師を分遣  
さまじく。皆之を誅さしめ。高尾張の邑に兎賊あり。其首魁の人となり。ハ  
身短く。手足長く。頗侏儒の状あり。まゝ蜘蛛ふも似しを。土人これを  
土蜘蛛と呼り。軍士これを襲撃し。時戯小葛の網を造り。れを掩て捕へ  
たる。おとる。其邑の名を葛城とて呼るなり。其他磯城の八十島師とて。悉  
皇師の爲に滅さし。虜賊盡く平ざり。

日本開闢由來記卷三





